

## 「宿」について思うこと

尾崎裕司

あたりまえの事ではあるが、地質調査の仕事というのは相手が自然であるだけに、必然的に出張が多くなる。ボーリングなど、現場の作業に携わっている方々に比べれば私の場合はまだ少ないのだろうが、それでも年間100~150日は出張に出ている。ここでは、出張につきものの“<sup>やど</sup>宿”について感じることを、思いつくまま書いてみようと思う。

ひとことで宿といっても、ホテル、旅館、民宿など、種類とグレードは様々である。現場の出張ということになると田舎町の場合が多いので、そこにある宿に泊まらざるをえないから、宿の種類を選ぶことはできないが、選択の余地があれば“民宿ふうの旅館”が理想的である。言い方を替えると客を家族扱いしてくれる旅館といった感じだろうか。

立地条件も大切である。仕事場に近くて街にも近い、というのがいい。通勤時間というのは、自宅から会社まで行くのにかかる時間ばかりではなく、当然出張先でも存在するのである。近いにこしたことはない。街というのは、ここでは飲み屋とほぼ同義

である。食事が済んでから街の飲み屋へ出かけていくと、地元の人達の話が聞けて面白い。私は群馬の生まれなので、東北の人々の暮らしというのはなかなか興味深いものがある。また、飲み屋で地元の人に、我々がやっている仕事について痛烈な批判をされることもある。これはこれで貴重なことだと思う。

宿での楽しみのひとつは、何ととっても食事だろう。土地土地の季節の食べ物や当地の銘酒など、それこそ究極のメニューでいっぱいになったテーブルにつくと、まさに至高の気分である。東北には珍味（だと私は思う）が多い。三陸では何ととってもホヤが一番の珍味かもしれないし、マンボウはやはり三陸で初めて食べた。秋田で珍しいと思ったのは“ちょろぎ”である。呼び名は様々であろうが、あの渦を巻いたような形はなんともユーモラスである。どうしても箸をつけられなかったのは青ミズのたたきだった。青味がかかった灰色のネバネバの物体が器に入っているのを見て、とても食物には見えなかったのだ。話がそれた。とにかく美味しい食事は宿の楽しみである。

ただし、宿泊が長期になると立派な料理にも飽きがくる。こんな時、絶好のタイミングでカレーライスやチャーハンとかうどんとか、そういった普通の家庭料理を出してくれるのが、理想の民宿風旅館だと思う。

食事といえば、我々の仕事には弁当がつきものである。夕食には気を使っても弁当には無頓着な旅館が多い中（作ってくれない所もある！）、ランチジャーをたくさん用意しておいて、温かいごはんと味噌汁を弁当にもたせる民宿があった。冬の現場になんとも暖かい心遣いである。

さて宿の楽しみのもうひとつは風呂であろう。温泉だったら文句はない、と言いたるところだがそうでもない。温泉つきならランクが1つあがるのは確かだが、それに甘んじてはいけない。たとえ民宿風旅館であっても、風呂だけは温泉ホテル風の、湯量が豊富で広々とした風呂を期待したいものだと思う。

食事と風呂ともてなし、この3つが基本的な最低条件だと思う。あとは付属の条件とでもいうべき点である。部屋は広くて、夏は涼しく冬は暖かいのがいい。電話は赤やピンクのコイン専用よりカードが使えるものがいい。コピーやファクシミリもある方がいい。テレビは100円玉を入れなければ映らないタイプのものはもってのほか。宅急便も扱っていると便利である。などなど注文をつけたらきりが無いが、私が思う

理想の宿の条件はざっとこんなところである。なんとわがままなことか、とも思うが、わがままは客の常としてかんばんしてもらいたい。

とにかく、この業界は現場へ出なければ始まらないので、宿泊ということに関して思うところのある方が多いであろう。アンケートでもとって、地質屋が選んだ東北の宿ベストなんか、というような企画は、結構おもしろいのでは、などと考える今日この頃である。☹

（日本工営㈱）

